

# 生存科学研究ニュース

VOL. 14. NO. 6 1999. 11. 10 発行

発行 財団法人 生存科学研究所

〒104-0061 東京都中央区銀座4-5-1  
電話 03-3563-3518 FAX 03-3567-3608

## 第4回銀座ナイトセミナー 「生きる」シリーズ報告

第4回銀座ナイトセミナー「生きる」シリーズが、1999年10月29日（金）18時より、生存科学研究所会議室にて開催された。「経済学者の『生きる』」と題して、生存科学研究所理事長で、一橋大学名誉教授の江見康一氏による報告が行われた。

江見氏は、まず自身の体験から報告された。江見氏の奥様は、去る9月26日に膵臓癌のため亡くなられた。結婚して以来、53年という長い時間を共有してこられた奥様を亡くし、江見氏は心から「余人をもって代えがたい」という言葉の意味を深くかみしめたと言う。しかし、死を“生の終焉”ではなく、“生の完結”と受け止めることにより、奥様の死という大きな悲しみを、プラスに転換していくこともできるのではないかと語られた。

奥様の闘病生活を通して、江見氏は現代医学の限界を考えないわけにはいかなかったと

言う。例えば奥様の場合、癌が見つかったのは6月だが、発見時点ですでに手遅れだった。死亡した時点から逆算すると、膵臓癌が発生したのは3年も前にさかのぼる。江見氏は、「医師は私たちに早期受診を勧めるが、早期発見が伴っていない」としたうえで、「現代医学は、人体を精密に解明して病気の原因を分析的に調べることは得意だが、発見や解明の後のケアは遅れているのではないか」と、実感に根ざした重要な問題を指摘された。



臓器別に体系化されている現代医学は、医療提供側の効率をいかに上げるかに重点が置

かれており、医療を受ける側に対する心配りという点は確かに足りない。特に、もはや手の施しようがない段階に至ったら、「いかに“安心立命”の境地に患者を導くかが、ターミナルケアだ」と述べられた。

その他にも、究極のサービス業(?)としての葬祭業の実情や、近代経営学と医学とのアナロジーなど、多岐にわたるユニークな考察を示されたが、紙面の都合ですべてをお伝えできないのが残念である。最後に江見氏は、来る21世紀に人類の生存を考える上でのキーワードは「サステナビリティ」と「アダプタビリティ」であるとし、新しい経済学を構築していく必要性を強調された。

(津谷喜一郎/北澤京子)

#### 生存科学講座報告

平成11年度生存科学講座「人・つながり」を大柱にした生命倫理について考える3回の講演会のうち第1回目が、去る9月25日(土)、銀座教文館ビル9階会議室にて開催されました。第1回目は「生存・生まれる」と題して、講演者には生存科学研究所を代表し、生存科学研究所理事で内科医の梅園忠氏と、大阪府立大学教授森岡正博氏をお願いしました。

開会に際し、生存科学研究所理事長江見康一氏が、生存という意味を簡潔に述べられました。最初の講演者の梅園氏は、医師として過ごされたご自分の経験から今の医療の在り方に対しての疑問や欠けているものについての考えを述べられました。参加者にとっては、経験に基づいた現場の力をとても大切な

ものとして再認識できたと思います。

森岡氏は「他者の到来」ということがどのような力を持っているのか、現代の先端医療の在り方に対する疑問などを大変わかりやすく解説されました。お二人は共通して、もっと多くの人々が真剣に愛について討議すべきだと説いていました。講演後の質疑応答も大変活発に行われ、終始緊張感に満ちた講演会だと実感しました。最後に生存研常務理事の川崎富作氏から「人間は考える葦である」ということをつくづく考えさせられる素晴らしい講演会であったというご挨拶をいただき閉会となりました。(小島静二記)

第2回目は10月23日(土)14時より教文館9階会議室で開催されました。テーマは第1回の「生存・生まれる」を受け、「生存・生きる」とし、脳死状態からの臓器移植等が現実となった今日、改めて「日本人は生命倫理にどう対応してきたのか？」を考える講座として計画されました。講演者には日本におけるバイオエシックス(生命倫理学)の導入及び発展に貢献された、ホアン・マシア氏(上智大学神学部教授)と米本昌平氏(三菱化学生命科学研究所社会生命科学研究室室長)をお願いしました。

青木清常務理事から開会の辞があり、講演者お二人の紹介を含め今回の講座の意義を述べられました。ついで、筆者(大林)の司会により講演者のお話を30分ずつ伺いました。

最初に、マシア氏は、16年前の生存科学研究会における故武見太郎先生の思い出を話された後、昨年10年振りに日本に戻った時の日

本における生命倫理の状況へのとまどいと、スペインにおける生命倫理の議論について述べられました。日本においては、最近、生殖技術や出生前診断等をめぐる議論がなされているが、差別などについての基礎的な議論がないこと、またスペインでは、臓器移植の法制化はうまくいったが、生殖技術に関してはうまくいっていないことを挙げ、生命倫理の議論には専門家、行政、そして一般市民の間のパイプを作ることの必要性を指摘されました。

米本氏は諸外国の科学技術政策比較を研究の方法として、比較政策分析により日本の政策立案に影響を与えることを目指し、これまでバイオエシックスに相当する問題を技術政策の問題から考えてこられたことを紹介され、医師・患者関係、医療専門職集団、そして医療専門職集団によるガイドラインの作成と集団外部との調整等の問題について話されました。日本には欧米のようなプロフェッションとしての医療専門職集団の役割を担うものがないことが生命倫理の議論に大きな影響を与えているとし、日本においては強制加入の医療専門職集団を形成するのは医師法の改正などが必要になり、かなり問題が大きくなるので、別の道を探る必要があるのではないかと話されました。しかし、武見日本医師会会長時代には、会長とブレーンによる擬似的な医療専門職集団としての役割が日本医師会に成り立っていたと指摘されました。

このあと、フロアーを交えた質疑応答に移り、そこでは、医療専門職集団と患者・市民

との関係に関心が向けられ、日本における専門家と一般市民の関係についての議論が今後なされていくことの重要性が示唆されました。最後に師岡孝次常務理事より閉会の辞があり充実した講座を締めくくりました。

今回は、日本におけるバイオエシックスの代表的な研究者であるお二人を迎え、生命倫理の問題が日常化してきた日本における今後の対応への具体的なヒントが得られた講座であり、特に、お二人の講演者の武見太郎先生への言及は研究所にとって重要な意義を含んでいたと思われました。(大林雅之記)

#### 〈小冊子販売のお知らせ〉

講座の内容を各々小冊子にまとめ、ご希望の方に販売しております。

購読を希望される方は、ファクスまたは郵便でお申し込みください。郵便の場合は、冊子代金（1冊につき200円、送料無料）分の切手を同封してください。

タイトル： 講師（敬称略）

#### 98年度

- |               |       |
|---------------|-------|
| 1. 教えること      | 鳥山 敏子 |
| 2. 教わること      | 保坂 展人 |
| 3. 看ること       | 川崎 富作 |
| 4. 親子のきずな     | 小林 登  |
| 5. 夫婦のきずな     | 春山 満  |
| 6. 隣人、そして福祉へⅠ | 上田 紀行 |
| 7. 隣人、そして福祉へⅡ | 江見 康一 |

#### 99年度

- |             |       |
|-------------|-------|
| 1. 生存・生きる   | 梅園 忠  |
| (当冊子のみ500円) | 森岡 正博 |

#### 第5回生存学研究会報告

表記研究会が8月29日、彦根市に於いて開催された。テーマは「生態学（環境）から哲学へ」。発題者として日高敏隆氏、そして独自のアイデンティティを持ち、強い批判精神

を持つ有識者をと考え、環境庁大気保全局長の廣瀬省氏（行政に入る前は精神科医）と神戸新聞の三木進氏にお願いした。

三氏共、ご自分の公式職業や専門を語った後、討論に入ると全く公的な立場としては公言しにくい強烈な批判的私見を述べられた。

後半の討論は、戦後日本で言う民主主義とは何か、が議論の焦点となった。そして平等平等と声高く誰もが主張するその平等の意味、民主主義=平等といった大衆の錯覚、それを操作する政治、マスコミのあり方、アイデンティティをもたない日本人の性格など多様な指摘がなされた。この多様な混乱は日本人の根っこに培われて来た、お上(かみ)依存性や付和雷同型の国民性によるもので、一朝一夕に変わるものではない。こういう混乱期には大衆が求めるようなオピニオンリーダーが現れることはかえって危険で、一斉にその個人に依存し、多様性を喪失する恐れがある。これこそ最も危険な状態で、今はゆっくり時間をかけ、徐々に一人一人が自己確立してゆくことが最も肝要であり、その意味ではゆっくりペースの方が安全で、あせってはならない、という考え方で意見の一致を見た。

こういう指摘は公的場所ではあまり聞けず、これこそ実感のこもった本音だと強く感じさせられた。

討論を終えた後、滋賀県立大学のキャンパスを歩いた。広大な敷地を端から端まで歩いたら30分以上もかかるという。学内には畑や水田があり、学生が自由に遊び心で実験するスペースもある。建物はいろいろな人が分担設計したものだそうで、日本人離れした超モダンな雰囲気、3階以上は造らず、各学舎

はむしろ統一を欠くバラバラな建物でありながら、それでいて、不思議にも全体の調和があり、この大学に憧れる学生の多いこともうなづかれる。私はアメリカで訪問したシアトル郊外のシティカレッジ（日本の短大にあたる）の丘陵地帯に点々と広がる学舎と共通しているのを思い出した。どちらもキャンパス内を自転車が行き交っている。対照的に伝統を誇る市内のワシントン大学は、日本の旧国立大学と全く同じ雰囲気であった。若者が自由に学んで行かねばならないこれからの大学の一つの姿を強く感じた。（卜部文磨）

#### 編集小委員会

10月21日午前10時より生存科学研究所会議室において表記委員会を開催し、第10巻Bの編集と第11巻Aの原稿募集などについて検討しました。編集委員会では会員からの投稿をお待ちしています。

生存科学A（毎年3月31日締切）は自由な意見の発表の場として、また、B（毎年9月30日締切）は論文・研究ノート等、学術的な内容を主としており、論文は査読制度を採用しております。研究発表の場として奮って投稿下さるようお願いいたします。

#### 研究所日報

- |           |              |
|-----------|--------------|
| 9月17日（金）  | 生存科学講座打ち合わせ  |
| 9月25日（土）  | 生存科学講座       |
| 10月21日（木） | 編集小委員会       |
| 10月23日（土） | 生存科学講座       |
| 10月29日（金） | 川崎病研究会委員会    |
| 10月29日（金） | 第4回銀座ナイトセミナー |
| 11月13日（土） | 生存科学講座       |